

日本人大学生の英語「方略能力」に関する一考察

達川 奎三

(2006年10月5日受理)

A Study on the English Strategic Competence of Japanese College Students

Keiso Tatsukawa

The aim of this study is to develop a Strategic Competence Test for EFL learners and report some noteworthy features about the knowledge and awareness of communication strategies of Japanese college students. Communicative competence consists of several major sub-components. One of these, namely 'strategic competence', used to get little attention in foreign language classrooms. However, the importance of developing the strategic competence of learners has become increasingly recognized by researchers, practitioners, curriculum designers, and textbook writers. This study presents a brief theoretical background for designing a Strategic Competence Test, and gives examples of test items for assessing the strategic competence of students based on the ideas of Celce-Murcia *et al.* (1995). The test was conducted with 245 Japanese college students and their data was examined. The major findings were as follows: (1) The Japanese college students found it difficult to figure out the situations involving the use of 'avoidance strategies' and 'checking the interlocutor's comprehension'; (2) they did not have much difficulty imagining the situations involving 'requesting strategies when non-understanding', 'achievement or compensation strategies', and 'appeals for help'; (3) the higher score group performed better on test-items involving 'checking the interlocutor's comprehension', and clarifying the information positively, such as 'self-rephrasing' and 'confirmation strategies'.

Key words: strategic competence, communication strategies, diagnostic test

キーワード：方略能力，コミュニケーション方略，診断テスト

本研究の目的

本研究は、英語学習者の「方略能力」を診断する面接テスト開発のための基礎研究として、その能力を支えるコミュニケーション方略の知識に関する診断テストを提案し、日本人大学生の英語方略能力の一端を探ろうとするものである。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：深澤清治（主任指導教員）、中尾佳行、

瀨口 脩、森 敏昭、迫田久美子

1. 研究の背景

外国語教育界は学習者の実践的コミュニケーション能力の育成のために、あらゆる領域・分野で指導と評価の工夫・改善を試みている。「コミュニケーション能力」の概念をどのように規定するかについては、1980年前後からいくつかの提案がなされ、多少のバリエーションはあるが、ほぼ「基本形」のようなものが確立している（Savignon 1983, Canale 1983, Bachman 1990, Celce-Murcia *et al.* 1995, Bachman and Palmer 1996）。いずれの「仮説」も、「コミュニケーション能力」はいくつかの「下位構成要素」(sub-components) から成

るとしている。(なお、コミュニケーション能力概念論の詳細については柳瀬 (2006) で示唆に富む議論がなされている。)

この「下位構成素」のなかで学校教育においてあまり力点をおいて指導されてこなかった構成素に strategic competence 「方略能力」がある。日常生活でコミュニケーションが挫折・頓挫する場面は多いが、その時に必要になるのはコミュニケーションを「維持」「修復」する能力である。また、もっと大切なことはそうした事態に陥らぬようコミュニケーションの過程で挫折を「予防」する能力であり、これらの能力の重要性を多くの研究者が指摘している。

Learners may be familiar with the grammar of a language, may know a vast amount of vocabulary, and can still 'fail', that is, let themselves down in real conversation. Speaking skills are not enough: spontaneous, on-line interaction in a social setting, with partners to listen and react to, requires additional competence.

(Dörnyei and Thurrell 1992: x)

(これ以降の下線や強調はすべて筆者によるものである)

..., they (=successful listeners) monitor their comprehension as they listen ('Have I understood that last bit?') and they assess how adequate the speaker's message is ('Has she given me clear enough information?'). (Lynch 1996: 88-89)

Lynch (1996: 89) は方略を 'internal strategies' と 'interactive strategies' に大別し、対話者との意味交渉の重要性を述べ、さらに Færch (1981) による 'psycholinguistic strategies' と 'behavioural strategies' という分け方を紹介している。本研究では諸学者の知見をもとに、「方略能力」を「双方向での情報のやり取りと意味の交渉」をする際の「会話を維持・修復し、挫折を回避する能力」と捉えて論を進めたい。

2. 「方略能力」診断テストの開発 (項目リストの作成)

2.1. Strategic competence とは(構成概念リスト)

本研究で提案する診断テストの理論的枠組みとして依拠した Celce-Murcia *et al.* (1995) では、strategic competence を "knowledge of communication strategies and how to use them" (様々なコミュニケーション方略の知識とそれらの使用) と定義してある。Communication

strategies (以下 CS) の研究分野での構成概念リストとしては、まず Tarone (1981) が挙げられ、Færch and Kasper (1983), Bialystok (1990), Oxford (1990), van Ek and Trim (1991) などがある。ちなみに CS に関する研究は、話者がおかれた発話の社会的状況(例えば対人関係)や話者の心理的状況(例えば、発話に対する不安や話者の性格)といった要因をどう捉えるか、また、初期の研究は談話面からではなく語彙面だけに関心が寄せられていた、などの課題があったと言われている(岩井 2002: 79-83)。

2.2. 「学習指導要領」における CS に関する記述

「中学校学習指導要領」(平成10年告示)ならびに「高等学校学習指導要領」(平成11年告示)においても CS 指導を意識した文言が見られる。

[中学校, p.89]

- ・話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解すること
- ・つなぎ言葉を用いるなどいろいろな工夫をして話が続くように話すこと

[高等学校, p.120]

- ・繰り返しを求めたり、言い換えたりするときなどに必要となる表現を活用すること

これは教科の目標の一つとして「実践的コミュニケーション能力の育成」を目指す流れの中で、strategic competence を育成するための指導・評価が日本の英語教育界において市民権を得たことを示している。

2.3. Strategic Competence Test で検査する項目

冒頭で言及した学者のいずれもが「コミュニケーション能力」の構成素として strategic competence を取り込んだ仮説を提案しているが、筆者は Celce-Murcia *et al.* (1995) の仮説を軸としてテストの研究開発を進めることにした。その主たる理由は、何よりも外国語教授・学習を念頭において構想された「仮説」であるため、英語教員にとって極めて実践的であり、検査項目リスト作成にあたって示唆的であるからである。

Our construct is motivated by practical considerations reflecting our interests in language teaching, language analysis, and teacher training; our aim therefore has been to organize the knowledge available about language use in a way that is consumable for classroom practice. ... One obvious purpose of any model of this sort is to serve as an elaborated "checklist" that practitioners can refer to. (p.29)

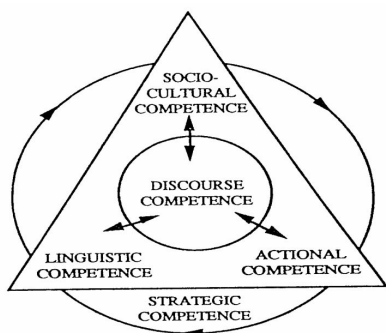


図1 Celce-Murcia et al. (1995) による
コミュニケーション能力の概念図

この仮説では「談話能力」を中心に位置づけ、文脈の中で発話をどう組み立てるかを重要視している。さらにこの能力は他の主要な能力と相互に作用し合い、方略能力はこれらすべてを補完するとしている（同掲書 p.9）。Strategic competence の下位要素を含む詳細については「資料」の通りであり、診断テストではそれらをできる限り万遍なく検査することが望ましい。

2.4. テスト開発の基本方針

Celce-Murcia らが列挙している strategic competence のテストは oral interview の形式で行うのが理想的である。ジェスチャーなどの非言語的な方略や音韻的な特徴を用いた方略などを含めた下位構成要素すべてを検査できるからである。しかしながら、それらは CS リストのごく一部に過ぎず、下位構成要素の中でペーパー・テストで検査できるものを対象とすることにした。Strategic competence の構成要素すべてを検査できなくても、学習者の「方略能力」に関する知識をおよそ推定できるのではないかと考えたからである。

各問いは対話形式を用いることにした。一文のみの提示では言語の使用場面やその機能をイメージしにくいからである。なお、多肢選択形式にした理由は、自由記述にすると解答者がある特定の CS ばかりを用い、診断テストとしての包括性を失う恐れがあるからである。なお、本テストで測ろうとしている能力は、コミュニケーション場面における挫折の修復や予防といった strategic competence の中核的な下位構成要素を扱っているために、選択肢によっては談話のスムーズな展開・拡張に貢献し正答になってしまうものもあり、それらの作成にも細心の注意を払った。その際、Grice (1975), Levinson (1983), Coulthard (1985), McCarthy (1991) などの談話分析・語用論における研究から多くの知見を得た。さらに、テストアイテム作成にあたっては、コミュニケーションの維持や挫折

の修復・予防を扱った場面を会話文に盛り込むことは当然であるが、CS に関する知識や意識 (awareness) そのものをできるだけ忠実に診るために、平易な英文になるように留意した。語彙は JACET8000 のレベル 3 (3000語) までで累計93.0% を占め、一文あたりの平均語数は5.7語、読みやすさの指標の一つである Flesch Reading Ease は88.1であり母語話者の小学校高学年が簡単に読める英文である。

3. 調査

3.1. 調査目的

- (1) 日本人大学生のコミュニケーション方略に関する知識を概観し、その特徴を探る。
- (2) テストスコアの上下位群でどのような特徴が見られるかを探り、指導のための示唆を得る。

3.2. 調査対象者

日本人大学生 1, 2 年生で合計245人。専攻は法学部, 経済学部, 文学部, 教育学部, 理学部, 生物生産学部, 総合科学部, 医学部, 歯学部, 薬学部, 工学部。TOEIC スコアの平均 (231人分) は499.0である。

3.3. 調査方法

開発した「方略能力診断テスト」(合計30問)に30分間で取り組み、「マークカード」に解答を記入する。

3.4. 調査結果

テストの結果と得点の分布は以下のようになった。

表1 「方略能力診断テスト」のスコア

| 人数 | 最高点 | 最低点 | 平均点 | 標準偏差 |
|-----|-----|-----|------|------|
| 245 | 30 | 6 | 24.3 | 3.6 |

4. データの考察

4.1. 集団全体の特徴 (日本人大学生245名分)

- (1) 平均点は24.3点 (正答率は81.2%), 標準偏差が3.6であり, 統計上の天井効果が少し見られる。
- (2) 「方略能力」を構成する下位構成ストラテジーのうち正答率の低いものは以下の CS である。

| | |
|-----------------------------------|-------|
| Avoidance or Reduction strategies | 59.6% |
| Comprehension checks | 64.6% |

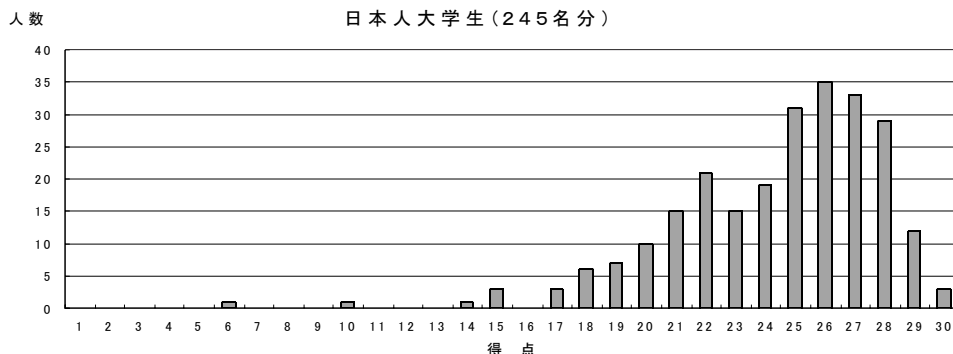


図2 日本人大学生 (245名分) の得点分布

「話題や談話を途中で回避したり、取り下げたりする」場面や、「対話者に対して理解の可否を自分から確かめる」ことに慣れていないことが窺える。

また、問題番号 (18) verbal expressions of non-understanding は正答率39.2%と二番目に低かった。しかし、談話の展開と選択肢の内容にやや理解し難い部分 (4.2.2. 参照) があり解答分布が分かかれ、この1問だけで「理解できていないことを言語を用いて表現することができない」とは結論付けることは早計であろう。

(3) 「方略能力」を構成する下位構成ストラテジーのうち正答率の高いもの

| | |
|--|-------|
| Requests when non-understanding | 92.9% |
| Achievement or Compensation strategies | 92.8% |
| Appeals for help | 90.9% |

「理解できない時に、反復・明確化・確認を(言語により)要求」したり、「コミュニケーション上の困難を何とか乗り越えようとする」言語の使用場面は理解し易いようだ。また、対話者に対して援助の要請をする言語の使用場面は教科書教材などでも頻繁に登場し、日本人英語学習者には馴染みがあるようである。

(4) その他

問題番号 (11) は正答の情報少し曖昧さを含んでいるため、誤答 (a) を選んだ学生が40.0%もいた。週末については言及がないので厳密には「一日おき」とは言い難いが、この種の曖昧さを含んだ発話することは日常生活ではよくある。テストという状況では (d) を正答として許容することに戸惑いがあったのかもしれない。

問題番号 (11)

A: I need to lose weight, so I've started to go to the gym.

B: How often?

A: Mondays, Wednesdays, and Fridays. In other words, ()

- (a) every three days.
- (b) the gym is open every day.
- (c) the gym is closed on Mondays.

* (d) every other day. (*印が正答)

4.2. テストスコア上位群と下位群の比較

テストスコア上位群 (44人) と下位群 (47人) の得点を比較すると「表2」のようになった。

表2 上位群と下位群のテストスコア

| グループ | 人数 | 最高点 | 最低点 | 平均点 | 標準偏差 |
|------|----|-----|-----|------|------|
| 上位群 | 44 | 30 | 28 | 28.3 | 0.6 |
| 下位群 | 47 | 21 | 6 | 18.7 | 3.0 |

$t(50)=21.7, p<.05$

4.2.1. 上位群と下位群ともによくできた問題

上位群の全員が正答し、下位群もほとんどが正答した問題は以下の通りである。両グループの正答率の差は6.4%以下であった。

問題番号 (6) : literal translation from L1 (母語からの逐語訳使用) (上位群=100.0%, 下位群=95.7%)

A: George, I'll clean up your room. ()

B: Oh, you mean the vacuum cleaner. It's in the next room. But I'll do it by myself, Naomi. Thanks

anyway.

- (a) When was the dishwasher broken?
- (b) How much is the rent for your apartment?
- * (c) Where is the sweeping machine?
- (d) Where is the nearby laundry?

問題番号 (12) : **appeals for help (直接的な援助の要請)** (上位群=100.0%, 下位群=95.7%)

A: What's this, Satoshi?

B: It's 'Omochi', Susan. It's made of rice. ()

A: 'Rice cake'.

- (a) When do you eat it?
- (b) What's the Japanese word for it?
- (c) How do you make it?
- * (d) How do you say it in English?

問題番号 (15) : **repetition requests (反復の要請)** (上位群=100.0%, 下位群=95.7%)

A: Where to, ma'am?

B: To the New Hiroshima Hotel, please.

A: ()

B: The New Hiroshima Hotel.

- (a) Is it near the station?
- * (b) Sorry. Pardon me?
- (c) It takes about 10 minutes.
- (d) You can walk to the hotel.

問題番号 (7) : **code-switching (言語の切り換え)** (上位群=100.0%, 下位群=93.6%)

A: Nice to meet you, Aya. Are you a student or do you work?

B: I'm not a student anymore. ()

A: We say you are an 'office worker' in English.

B: Oh, yes. I'm an office worker.

- (a) I quit my job.
- * (b) I'm an ... 'OL'.
- (c) I want to be a student again.
- (d) I use some English in the office.

問題番号 (20) : **repetition responses (反復による応答)** (上位群=100.0%, 下位群=93.6%)

(紙幅の都合により問題文・選択肢は省略)

これらの結果から、調査に参加した大学生はコミュニケーション上の様々な障害を乗り越え、英語使用者としての限界を補完するための知識を有していると考えられる。(とりわけ achievement or compensation strategies の下位区分における平均正答率は92.8%であった。)

また、「発話の再構築」「発話の繰り返しによる時間確保」「要約による応答」という方略に関する問題でも両グループ間にあまり差は見られなかった。(紙幅の都合により2例のみを提示する。)

問題番号 (5) : **restructuring (発話の再構築)** (上位群=100.0%, 下位群=87.2%)

A: Why were you late this morning?

B: The road was very ... ()

- (a) There were many trees on both sides of the road.
- (b) There were few cars on the road.
- * (c) There were an enormous number of cars on the road.
- (d) There was no noise on the road.

問題番号 (23) : **reduction responses (要約による応答)** (上位群=100.0%, 下位群=85.1%)

A: Mr. Yamamoto went to a casino in Honk Kong and lost \$30,000!

B: What? Say it again.

A: ()

B: Crazy!

- * (a) He lost \$30,000 at a casino in Hong Kong.
- (b) He lost \$30,000 on his way to a casino.
- (c) He borrowed \$30,000 from me to play at a casino.
- (d) He paid \$30,000 for his trip to Hong Kong.

4.2.2. 上位群と下位群で差の出た問題

両グループで正答率の差が最も大きかったのは問題番号 (18) である。下位群の36.2% ずつが (b) (c) を選んでおり、A による "That's OK." という発話を選んだこと、A による "Never mind." や "Don't worry." とほぼ同様の意味であることをよく理解できていなかったと考えられる。

問題番号 (18) : **verbal expressions of non-understanding (言語による無理解の表出)**

(上位群=77.3%, 下位群=6.4%)

A: Now that's all you have to do if you want to change the ringing mode to the silent mode.

B: ()

A: That's OK. Then, this time you could try it by yourself. I will read you the directions again.

B: Thanks.

- (a) I don't like the ringing sounds of mobile phones in the trains.
- (b) It's quite easy. I'm sure I can do it by myself.
- (c) I have tried many times and finally could change the mode.

* (d) I'm not sure I understand exactly.

両グループの間の正答率の違いという点で注目すべきなのは、「対話者の理解を確認する」方略使用の場面を扱った問題で、顕著な差が見られたということである。

問題番号 (30) : **checking whether the interlocutor can hear you** (聞こえているか否かの確認) (上位群=95.5%, 下位群=25.5%)

A: ()

B: I'm afraid not. We can't hear you.

A: OK. I'll speak up.

- (a) Can you speak to me now?
- (b) Am I talking too slowly?

* (c) Can you hear me?

- (d) I didn't like your story.

問題番号 (28) : **checking whether what you said was correct or grammatical** (表現の正確さの確認) (上位群=100%, 下位群=31.9%)

A: Hiroshi, I just love this *teriyaki* chicken. Tell me how to cook it.

B: I use grapefruits and honey to make the sauce and soak the chicken in it overnight. They are my 'hidden spices'. ()

A: We say 'the secret ingredients' in English but people can understand that expression.

B: Oh, I'm glad to hear that.

- (a) Is 'spice' the key ingredient?

* (b) Is that the correct expression?

- (c) Do you have different spices in your country?

- (d) Is *teriyaki* chicken getting popular?

問題番号 (29) : **checking whether the interlocutor is listening** (対話者が聞いているかの確認) (上位群=97.7%, 下位群=44.7%)

(問題文と選択肢は省略)

さらに「自らの言い換え」「確認のための応答」でも正答率の違いが大きかった。

問題番号 (11) : **self-rephrasing** 自らの言い換え (上位群=90.7%, 下位群=38.3%)

(問題文と選択肢は4.1.を参照)

問題番号 (24) : **confirmation responses** 確認のための応答 (上位群=77.3%, 下位群=6.4%)

A: I have two tickets for the movies, Naomi.

B: Oh, I wish I could go. I'm afraid I have to finish my report by tomorrow.

A: ()

B: Well, I guess not.

- (a) Who can help you with the report?
- (b) You like the movies?
- (c) So you are free this evening.

* (d) Then you can't make it?

これらのことから英語習熟度の高いと考えられる学習者は、自ら言い換えたり、対話者の理解を確認することによって、コミュニケーションの挫折を前もって回避しようとする積極的な態度の素地を備えていると考えることはできないだろうか。

おわりに (本テストの課題)

本研究から日本人大学生は全体として、英語での(1)話題や談話を途中で回避したり、取り下げたりする場面や(2)対話者に対して理解の可否を自分から確かめる場面での方略知識が足りないことが分かった。また、様々なコミュニケーション上の障害を乗り越えるための方略知識は備えているが、(1)自らの発話を言い換えによって明確化したり、(2)対話者の理解の可否を確認する、などによってコミュニケーションの挫折を積極的に回避するための方略知識を学ぶ必要性を確認できた。とりわけ英語習熟度の低い学習者には、このような挫折回避のための方略知識を身につけさせることが急務であろう。

また、本研究で提案した診断テストの課題としては(1)口頭での方略能力を診る場合はオーラルテストが

理想的であり、ペーパーテストではあくまで能力の一端である知識を診ることしかできない。

- (2) ある特定のCSに関する知識の有無を1つの問題だけで判断することはできない。(信頼性の問題)
 - (3) 各問題を1点で採点しており、CS項目の相対的重要度は議論がなされていない。(妥当性の問題)
 - (4) 各問題間での言語学上の難易度を均一化できたかどうかは検討の余地がある。
- などが挙げられる。

しかしながら、これまでにCSに焦点を絞った方略知識や能力に関する「包括的な診断テスト」がほとんどないのも事実である。それ故、上記のような本診断テストの限界や問題点は十分認識しているが、その出来ばえを精査することにより学習者や集団の方略能力はおおよそ推定でき、多方面に教育的示唆を提供できるものと考えている。今後はオーラルテストで「方略能力」の診断テストを実施する場合に、どのようなテストアイテム(タスク)が適切かなどを吟味し、実証的な研究に発展させたい。

【参考文献】

- Bachman, L. F. (1990) *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford University Press.
- Bachman, L. F., and A. S. Palmer (1996) *Language Testing in Practice: Designing and Developing Useful Tests*. Oxford University Press.
- Bialystok, E. (1990) "Some Factors in the Selection and Implementation of Communication Strategies." In Færch, C. and G. Kasper (eds.) *Strategies in Interlanguage Communication*. Longman. 100-118.
- Brown, G., and G. Yule (1983) *Teaching the Spoken Language*. Cambridge University Press.
- Canale, M. (1983) "From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy." In J. C. Richards and Schmidt, R. W. (eds.) *Language and Communication*. Longman.
- Celce-Murcia, M., Z. Dörnyei, and S. Thurrell (1995) "Communicative Competence: A Pedagogically Motivated Model with Content Specifications." *Issues in Applied Linguistics*, 6(2), 5-35.
- Coulthard, M. (1985) *An Introduction to Discourse Analysis* (Second Edition). Longman.
- Dörnyei, Z., and S. Thurrell (1992) *Conversation and Dialogues in Action*. Prentice Hall.
- Ellis, R. "Communication Strategies and the Evaluation of Communicative Competence." *ELT Journal* 38(1), 39-44.
- Færch, C. (1981) "Inferencing Procedures and Communication Strategies in Lexical Comprehension." Paper Presented at BAAL Seminar on Interpretive Strategies in Language Learning. University of Lancaster, September 1981.
- Færch, C., and G. Kasper (eds.) (1983) *Strategies in Interlanguage Communication*. Longman.
- Grice, H. P. (1975) "Logic and Conversation." In P. Cole and J. L. Morgan (eds.) *Speech Acts. Syntax and Semantics*. 3, 41-58. New York: Academic Press.
- Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge University Press.
- Lynch, T. (1996) *Communication in the Language Classroom*. Oxford University Press.
- McCarthy, M. (1991) *Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge University Press.
- Oxford, R. L. (1990) *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*. Newbury House.
- Rost, M. (1990) *Listening in Language Learning*. London: Longman.
- Rubin, J. (1994) "A Review of Second Language Listening Comprehension Research." *The Modern Language Journal* 78(2), 199-221.
- Savignon, S. J. (1983) *Communicative Competence: Theory and Classroom Practice*. Addison-Wesley.
- Tarone, E. (1981) "Some Thoughts on the Notion of Communication Strategy." *TESOL Quarterly*, 15, 285-295.
- van Ek, J. A., and J. L. M. Trim. (1991) *Threshold Level 1990*. Council of Europe Publishing.
- Vandergrift, L. (1999) "Facilitating Second Language Listening Comprehension: Acquiring Successful Strategies." *ELT Journal* 53(3), 168-176.
- 岩井千秋 (2000) 『第二言語使用におけるコミュニケーション方略 - Communication Strategies in the Use of Second Languages -』 広島：溪水社
- 達川奎三, 田中正道, ジョー・ラウアー (2006) 「英語学習者のための『方略的能力』テストの研究開発」『広島外国語教育研究』No.9, 1-17. 広島大学外国語教育研究センター
- 柳瀬陽介 (2006) 『第二言語コミュニケーション力に関する理論的考察 - 英語教育内容への指針 -』 広島：溪水社

資料「Strategic Competence Test で検査する項目リストと大学生のデータ」

| | 問題番号 | 正答率 |
|--|------|-------------|
| AVOIDANCE or REDUCTION STRATEGIES | | 59.6 |
| Topic avoidance | 1 | 68.2 |
| Message abandonment | 2 | 51.0 |
| ACHIEVEMENT or COMPENSATORY STRATEGIES | | 92.8 |
| Circumlocution | 3 | 78.8 |
| Approximation | 4 | 92.7 |
| Restructuring | 5 | 95.9 |
| Literal translation from L1 | 6 | 99.2 |
| Code-switching | 7 | 97.6 |
| STALLING or TIME-GAINING STRATEGIES | | 82.4 |
| Fillers, hesitation devices and gambits | 8 | 76.3 |
| Self and other repetition | 9 | 88.6 |
| SELF-MONITORING STRATEGIES | | 70.2 |
| Self-initiated repair | 10 | 81.2 |
| Self-rephrasing | 11 | 59.2 |
| INTERACTIONAL STRATEGIES | | 81.5 |
| Appeals for help | | 90.9 |
| direct | 12 | 98.8 |
| indirect | 13 | 85.7 |
| | 14 | 88.2 |
| Meaning negotiation strategies | | 79.7 |
| <i>Indicators of non/mis-understanding</i> | | 80.2 |
| Requests | | 92.9 |
| repetition requests | 15 | 98.8 |
| clarification requests | 16 | 91.8 |
| confirmation requests | 17 | 88.2 |
| Expressions of non-understanding | | 39.2 |
| verbal | 18 | 39.2 |
| Interpretive summary | 19 | 82.9 |
| <i>Responses</i> | | 88.1 |
| repetition | 20 | 98.0 |
| rephrasing | 21 | 82.0 |
| expansion | 22 | 93.5 |
| reduction | 23 | 95.1 |
| confirmation | 24 | 64.5 |
| rejection | 25 | 91.8 |
| repair | 26 | 91.8 |
| <i>Comprehension checks</i> | | 64.6 |
| whether the interlocutor can follow you | 27 | 33.9 |
| whether what you said was correct or grammatical | 28 | 73.1 |
| whether the interlocutor is listening | 29 | 82.4 |
| whether the interlocutor can hear you | 30 | 69.0 |

Average

81.2 %